

「図書室を変えてみよう！」

～子どもたちが利用しやすい図書室を目指して～

発表者 阿蘇市立山田小学校 山口 孝史

1. はじめに

本校は阿蘇五岳と外輪山からなる阿蘇谷の中央、ちょうど大観峰から見下ろした所に位置する全校児童64名、職員13名（平成19年4月1日現在）の田んぼに囲まれた小規模校である。子どもたちは男女とも素朴ながら明るくて元気な子が多く、晴れた日には、ほとんどの児童が外に出て思いきり遊びまわっている。私も昼休みに子どもたちから誘われることが多いため、グラウンドや体育館で一緒に楽しく遊んでいる。

そんな比較的のんびりした学校なので、事務職員が行う事務量も他の大・中規模校に比べて多いほうではない。そのため、今までは他の教職員が主として行っていた業務についても、事務職員の+ α （プラスアルファ）の取り組みとして、できるだけ積極的に関わりを持つように心がけてきた。結果的に学校全体の利益となるようなものであれば、何もしないよりも何かしたほうがいいだろうと考えたからである。

本レポートでは、そうした+ α の取り組みの中より、平成17年度に私が赴任してから取り組み始めた図書室の環境整備に関わる実践について述べていきたい。

2. 経緯と利点

平成17年度に私が赴任したとき、山田小学校では児童の読書推進について力を入れ始めようとしていた時期であった。だが、学校における読書推進の最も基礎となるべき図書室は、あまり手を加える機会がなかったのか、昔のイメージそのままの暗くて使いにくい場所という印象だった。「この図書室を子どもたちの利用しやすい、明るいイメージの図書室に変えていくことはできないか？」そう思っていた私は、後述するあるきっかけが重なったこともあり、新しい+ α の取り組みのひとつとして、図書室の環境整備に関わる実践に取り組むことにした。

実際に事務職員が図書室の環境整備に主となって関わることによって、次のような利点が考えられる。

- ①学校全体における読書推進への取り組みに直接関わるができる。
- ②予算を伴う事項について、状態の把握が容易であり、経費節減に努めることができる。
- ③図書室運営において、図書担当教諭等にかかる事務負担を軽減することができる。

もちろん私一人ではできない部分も当然出てくるであろうから、担任や図書担当教諭とも連携し、こうした取り組みに対する協力をお願いした。

3. 具体的実践

(1) 本棚、書架のレイアウトを変えてみよう！

「図書室が暗いから、本棚を半分に切りたいんだけど、手伝ってもらえる？」

最初のきっかけは私が山田小学校に赴任して早々の教頭からの一言だった。

そこで図書室に行ってみると、確かに2m大の本棚や書架が狭いスペースに4列ほど並んでおり、室内全体が暗いイメージを持っていた。これでは小学生には使いづらく、圧迫

感もあるだろうと納得し、実際にのこぎりを使って背の高い本棚をすべて半分に切ってみました。すると視界を遮るものがなくなったため、室内はかなり明るくなった。「これはなかなかいいですね。」とたった今半分に切った本棚を上下別々に並べると、これもまたちょうど小学生が使いやすいくらいの高さの本棚となって、とても具合が良いように見えた。そこで私から「どうせならこの機会に思い切って図書室のレイアウトを全面的に見直してみてもどうですか？」という提案をしたところ、「では、そうしましょうか。」ということになった。

本校の図書室はなかよし学級と放送室の間にあるが、少し特殊な構造をしている。詳しい構造についての説明は省略するが、廊下側の壁が可動式となっているため、これを上手に使いえば廊下と一体となったオープンスペース的な図書室にできるのではないかと考えた。



ハンガー書架

そこで、まず入口以外閉じたままだった可動式の壁を3分の2ほど取り外すことで、室内全体の照度を上げるようにした。次に、寝転がったり、胡坐をかいたりできる自由なスペースを取り入れたいという意向で、3畳の畳敷き読書スペースを新しく取り入れることにした。畳も新しいものではなく、倉庫に眠っていたものを畳表だけ替えてもらうことで、費用を抑えることができた。最後に半分に切断した本棚や書架を適当なところに並び替え、廊下側にはハンガーを利用した立てかけ書架を作成するなどして、少しずつではあるが、現在の図書室の原型を作っていった。

(2) 古い図書を思い切って廃棄しよう！

大方の原型は作ったものの、学期中は児童が学習で利用することがあるため、図書室の大きなテコ入れは出来ず、とりあえず図書の整理作業を少しずつ行うことにした。

特に目に付いたのは、汚れて変色したり、背表紙が破れてタイトルも分からない図書が多いことだったため、まず最初に図書台帳を調べて、蔵書数や廃棄状況などを確認する作業から始めてみた。すると、平成10年度に45冊の図書が廃棄されて以降、まったく図書の廃棄が行われていないことが分かった。

そこで、図書担当教諭と協力し、思い切って古い図書や傷んでいる図書、児童が手に取りそうにない図書などを廃棄して、図書室をすっきりさせることにした。

廃棄する図書の選定や図書台帳の整理、物品不用決定書の作成など、やってみるとこの作業は意外と手間がかかり、結局年度末近くまで地道に作業を続けることとなった。このとき廃棄した図書数は、寄贈図書等を含めておよそ800冊で、当時の山田小学校蔵書数の6分の1に達した。

(3) 図書分類を見直そう！

平成18年度に入り、本格的に図書の分類と配置を見直すこととした。

まず、古くて汚れていたプラスチック製の旧分類表を廃棄し、小学生にも分かりやすいように工夫した図書分類表を新しく作成してみた。あまり分類を細かく分けても、逆に混乱するおそれがあるため、基本的には大分類ごとに本棚や書架に分けて入れていくようにした。17年度は私たち教職員がほとんどの業務を行ってきたが、18年度は少しでも図書に

触れてもらおうということで、図書委員を中心とした児童たちにもこういった仕事を手伝ってもらったようにした。

それまでは調べ学習で図書室を利用する際、どこにどういった図書があるか、児童のみならず職員にも分かりにくかったようなので、分類毎に図書を配置し直すこの作業は、児童にも取り組みやすく意味のあるものだったようである。

部活のない放課後の空き時間を利用して作業を数回行ったのだが、慣れてくると児童からも「先生この本はこっちの本棚に置いたほうがいいんじゃないですか？」という図書の配置に関する意見や「もう少し見やすい本棚があればいいと思います。」「どうして山田小学校には〇〇の本は置いてないんですか？」といった図書室に対する生の声を聞くことができた。これらの意見は、その後の図書室整備の取り組みうえで、私自身とても参考となった。



(4) 図書館の研修に参加してみよう！

それまでインターネット等でいろいろな情報を仕入れて、図書室の環境整備に役立ててはきたが、図書室に関わって1年が過ぎたこの頃になると、実際に図書室運営に関係するような研修を受けてみたいと思うようになった。

そこで8月に熊本県立図書館主催で開催された「図書館のレイアウトとディスプレイの実技講座」に参加することにした。講師の平湯文夫氏は、長崎市で図書館づくりと子どもの本の研究所を開かれており、国内で多くの公立図書館や学校図書館の改築や改修等に携わってこられた方である。県内では山都町図書館がいわゆる「平湯モデル」の図書館である。平湯氏の講演で私が特に印象に残ったのは、次のような内容だった。

- ・ 図書館で大切な家具は書架である。図書館で一番大切な本を、利用者にもぐり合わせるためにディスプレイする家具だからである。書架は料理をおいしく見えるように盛り付けるお皿のようなものであって、収納架ではない。
- ・ 書架は奥行きが浅く、側板と中仕切りはさらに狭く、本が前面にでるものがよい。
- ・ フロアに置く書架はすべて視線を遮らない高さにすると、圧迫感がなく見渡しやすい。
- ・ 書架があって、閲覧机があればいいというのが従来の図書館。図書館のレイアウトを考えるとき、まず最初に、楽しいところにするにはどうするかを考えてほしい。
- ・ 古い本などは廃棄する。古びた本1冊は新しい10冊の本の鮮度まで奪う。

実際に学校で取り組んでいる最中の内容であったため、「なるほど」「そうなのか」の連続でとても勉強になったし、それまでやってきた取り組みが方向違いでなかったということでも多少安心することができた。

また、その日会場の都合で参加できなかった天草市図書司書の森頭子氏のディスプレイの事例発表と実習についても、後日ご好意により、資料を送っていただくことができたため、私にとってはとても有意義な研修であった。

(5) 手づくりで書架を作ってみよう！

図書館研修を受けて、書架の必要性について十分認識することができたわけだが、当然のことながら、小規模校で厳しい財政状況のなかで、実際に新しい書架を購入するほどの

予算はなかった。

(1) で述べたとおり、現在本校図書室にある本棚は、すべて半分に切ってしまうという裏技によって、すべて低い高さの本棚となっていたため、これをうまく利用すれば、もう少しどうにかできるのではないかと考えた。

最初にどこにどういった書架を配置するか検討し、従来の低い本棚の上に、収納型ではなく展示型の書架を作ることと決め、ついでのということで、各教室に学級文庫用の書架も作ってみることにした。書架のデザインは平湯モデルを参考にし、多少余裕のあった原材料費を利用して木材を発注することで、必要経費も大幅に安く済ませることができた。



両面、片面書架

作成に当たっては、とりあえず3種類の書架（両面傾斜タイプ4つ、片面傾斜タイプ4つ、教室用8つ）のうち、それぞれひとつを見本として作成し、残りを図書委員の活動の一環として、子どもたちと一緒に作成していくこととした。当初は面倒くさいと言っていた子どもたちも、慣れていくにつれ、ものづくりの楽しさを味わうこともできたようであるし、自分たちで作ったものとして、物を大事にする心や愛着心が持てたようだった。



教室用書架

作成後、実際に設置し図書を並べてみると、傾斜（両面・片面）書架はハンガー書架よりだいぶ見栄えが良く、図書室全体に本が溢れ出ているような雰囲気になってきた。また、従来の本棚で窮屈そうに並んでいた絵本などが、表紙を前面に掲げることができるようになったため、児童が図書を選ぶ際、積極的に新しい書架のものを取りようになり、意図的に「これは読んでほしいな。」と思う図書を並べると、翌週には借りられているということも多くなった。

さらに、平成18年度の卒業記念品として、図書室と廊下の空いていたスペースに保護者の手づくり本棚を新しく寄贈していただき、図書を配置・収納する場所をさらに広げることができた。そのため、今年度になってから、最も使いやすかった片面傾斜タイプの書架を図書室に6つ、1～6年の各教室に1つずつ新しく作成して配置し、できるだけ児童の目を引くような図書の見せ方に気を配るようにしている。

(6) 掲示物を作ってみよう！

だいぶ図書室も雰囲気が変わってきた。しかし、まだ何か足りないものがあるような気がする。そう思って室内を見回すと、「図書室では静かに！」とか「図書室の利用のしかた」など年代物の掲示物が目に付いた。そういえば平湯氏が「図書室は静かに勉強するところではなく、本に親しむ場所です。勉強するのは教室や学習ルームで十分です。」と言われていたことを思い出し、これらの古い掲示物は取り外して、もう少し明るい感じの掲示物を作ってみることとした。

掲示についても、単純にパソコンとプリンターで印刷した無機質なもので済ませるのではなく、温かみのあるものにしたいと考え、研修会後に送付していただいた森氏のディスプレイ事例を参考に、切り絵や貼り絵を使った手づくりの掲示物作成を図書委員の児童と一緒に取り組んでみた。



いざやってみると面白いのだが、意外と作成に手間がかかるため、できるだけ月に1回のペースで季節や行事に応じた掲示物を中心に作成していくようにした。1月はお正月、2月は節分、3月はひなまつり・・・といった具合である。これらの掲示物に対する児童の反応はまちまちで、高学年になるほどあまり気にしない子が多く、低学年になるほど興味、関心を示す子が多かった。もちろん以前あった年代ものの掲示物よりも、はるかに明るさが増したように見え、図書室全体を見渡すと、「ようやくイメージしていた小学校の図書室っぽくなってきたなあ」と感じるようになった。

(7) 図書室だよりを発行しよう！

今年度は新しい試みとして、図書室だよりを発行してみることにした。本校ではここ数年間に図書室だよりやそれに類するものが発行されたことがなかったため、児童及び保護者に向けて、図書室に関する情報を発信することで、より図書室と読書への関心を高めてもらいたいと思ったからである。私自身も教職員向けの事務だよりを出してはいるが、児童や保護者に向けてのお便りの発行は初めてとなるため、事前に校長に相談して了承を得、作成後は不適切な表現等がないように確認をもらうようにした。

図書室だよりの内容については、新刊図書や人気の本の紹介、学校における時事の話題などを中心とし、保護者向けの欄も設けるようにした。また、できるだけ低学年にも目を通してもらえるように、漢字にはフリガナを振るように心掛け、視覚的にも分かりやすくするために、写真や本の表紙なども取り入れるようにした。

6月に第1号を7月に第2号を発行したばかりで、特に今のところ保護者からの反響は特にないが、児童には多少なりとも効果があったようで、紙面にて紹介した図書委員さんオススメの本や新刊図書については、発行後しばらくの間貸し出し中のものが多かったようだ。

5. 成果と今後の課題

図書館の3要素とは人、資料、施設ということである。学校に置き換えると、図書司書、蔵書、図書室ということになるであろう。あいにく本校には図書司書は配置されておらず（平成19年6月より月に1回近隣校の司書が半日来てくれる事になった）、図書担当教諭も担任を持つことが多いため、なかなか図書室のほうまで手が回らないことが多い。図書購入費も例年20万円から30万円くらい配当されてはいるが、購入できる量は限られており、蔵書数も文科省の基準数に満たない状況だ。ならばせめて図書室の環境くらいはなんとかしてあげなければという思いで、このような取り組みを試みてみた。

以前と比べると随分良くなってきたとは思いますが、いざ図書室整備に携わってみると、改善すべき所や手を加えればもっと良くなりそうな所がもっとあるように思える。

児童はどう思っているかというと、「図書室が明るくなった」「本が選びやすくなった」など、ある程度嬉しい意見を聞くことができ、最近では、図書に関する質問やオススメの本などを直接私に尋ねてくる児童もでてきた。図書室に来る児童数についても、年を経るごとに増えてきているのを実感している。少なくとも、以前よりにぎやかな図書室になったことは間違いなく、本校の読書推進活動の一翼を担うことはできたように思われる。

次に予算面で振り返ってみると、この2年半の取り組みでかかった主な費用が畳の張替え代（3枚×4,500円）、書架作成用材料代（約50,000円）のみで済んでいるため、掲示物で使用した画用紙等の材料代を含めたとしても全体で7～8万円、1年当たりになると2～3万円の費用でこれだけのことができたといえる。卒業記念品での本棚寄贈があったとはいえ、費用対効果の面から考えても十分な成果を残せたのではないだろうか。

また、もうひとつ成果を挙げるとすると、児童だけでなく、教職員全員に図書室に対する意識の向上が見られるようになったということだ。最近では、教室設営で作った掲示物等を図書室用にアレンジして持ってきてくれたり、教室用に作成した書架をうまく利用して、教室内での図書の見せ方を考えて実践されている職員も増えてきた。これらも、本取り組みにおける相乗効果であるといっていいたいだろう。

これからも今までやってきた取り組みを継続しながら、購入図書の選定等についても、情報収集等を行ってより関わりを持つようにし、もっと子どもの視点にあった図書室づくりを行っていけるように努力していきたいと思う。

最後になるが、今後の学校における事務職員像を考えた場合、従来の職務だけでなく、学校運営に基づいたより幅広い視野で全体を見据えた取り組みができる事務職員、+αの取り組みができる事務職員が必要とされる可能性が高い。事務職員という仕事を選んで働いている限り、それは避けようがない事実であろう。もちろん、各学校の規模や状況によってできること、やれることは様々であるとは思いますが、そういった意味でも、本レポートにおける+αの取り組みが少しでも皆さんの参考になれば幸いである。



現在の山田小学校図書室



切り絵、貼り絵を作る図書委員さん



出来上がった作品(絵本よ切)